

# 高等学校の討議型道徳授業の理論と実践に関する研究

## — 動画教材の教育的意義について —

小川 哲哉\*

(2019年10月23日受理)

Study of a theory and the practice on Discussion type morality class of the high school  
About the educational significance of the animation teaching materials

Tetsuya OGAWA

キーワード: 高校道徳、動画教材、言説分析、討議活動

茨城県の高등학교（以下、高校）第2学年のホームルーム活動で実施されている「道徳プラス」は、今年で3年目になる。道徳プラスでは、課題について互いが納得できる合意形成を目指す「討議型」の学習と、モラルスキルトレーニング活用した「協働型」の学習を行い、将来自立した社会人に成長する人材を育成している。授業テキストとしては『高校2年生の道徳プラス』を使用している。このテキストでは活字教材を使用しているが、討議型の学習では、活字による教材理解がスムーズに行えない生徒も少なからず存在する。そこで本研究では、活字教材を動画教材に作り替え、その教育的効果を探る論究を行った。そのためにオリジナル教材「みんなの桜の木」の動画教材を作成した。その特徴は、単なる動画ではなく、デジタル紙芝居的な「フォトムービー」形式の動画である。この動画教材を茨城県A高校での授業実践ではフォトムービー教材に対する生徒の印象をインタビュー調査で明らかにし、さらにB県の教員向けの質問用紙調査も行った。その結果様々な面で動画教材の有効性が確認できた。

### 問題の所在

茨城県では、2016年度より高校2年生のホームルーム活動の時間に、課題解決学習を行う討議型の話し合い活動と、モラルスキルトレーニングを活用した協働型のロールプレイ活動を行ってい

---

\*茨城大学教育学部

る。そのためのテキストとして、茨城県教育委員会が編集した『高校2年生の道徳プラス』を使用しているが、どちらの活動の教材も基本的には読み物教材をベースした活字教材である。そのため、活字による教材理解が十分に行いえない生徒が少なからず存在する。

特に討議型の話し合い活動では、ジレンマ例話による価値対立の理解や登場人物の布置関係がすぐには理解できない生徒がおり、そのため課題理解とコミュニケーション活動がスムーズに行えない状況が問題になっている。そのため、活字とは違う動画教材の開発の必要性が教育現場から指摘されている。

### オリジナル教材「みんなの桜の木」の動画化と教育実践の分析

本研究のために作成した教材「みんなの桜の木」は、オリジナル教材でモラルジレンマ例話の形式になっている（荒木2013）。以下その全文を引用しておきたい（小川2018）。

#### 【みんなの桜の木】

A小学校の桜の木は、半世紀も前に植樹された大切な木である。4月の入学式ごろには桜の花が満開となり、それは素晴らしい光景であった。A小学校を卒業した高校生Bたちも通学路から見える桜の木を通じて母校A小学校への愛着と郷土愛が深まるのを感じていた。

だから、小学校近郊の住民から桜の木の取り扱いをめぐる批判が起こっていることは意外だった。一部の住民からは桜の枝が自分の家の敷地内に入ってきたり、桜の花びらが大量に庭に落ちてくるので、掃除が大変であるとの批判が学校側に起こされ、できれば切り倒してほしい旨の陳情書が出されたことは考えられないことだった。

しかし、桜の木の様子をじっくり観察していくと、そのような苦情が出されたことに一定の理解もできた。けれど、桜の木を切り倒すことには反対で、何とか桜の木を守りたいと思い、地域住民の集会に参加し、苦情を言っている一部の住民と話し合いたいと思った。

#### 【話し合い活動のヒント】

①問題になっていることは何でしょう。

②学校の桜は、地域住民たちにとってどのような意味があるかを考えた上でB君たちは桜の木の存続のためにはどうすればいいでしょうか。集会に参加する皆が納得できる意見を考えてみましょう。

この教材は、二つの価値葛藤を抱えた典型的なジレンマ例話になっている。ただ、単なるモラルジレンマでは、価値対立が収束せず、いわゆるオープンエンドになってしまうため、一定の合意形成が可能となる構成にしている。そのためこの教材では、A小学校を卒業した高校生Bたちが母校の桜の木を守りたいとする自然愛護の価値と、桜の枝や花びらによる日常生活上の問題を取り除きたい一部住民たちの自他の権利の尊重という価値が対立しながらも、その対立を乗り越える形で、桜の木の存続を目指す方向性で話し合う活動ができるようにしている。これによって、価値葛藤や対立のままで終わるのではなく、話し合い活動を通して得られる最適解や納得解へと導かれる学習が可能となった。

この教材の動画化の経緯については、拙論を参照していただきたいが（小川、長島、高橋 2019）、ここでは動画化されたフォトムービー形式の教材を紹介しておきたい（図1～6）。



図1

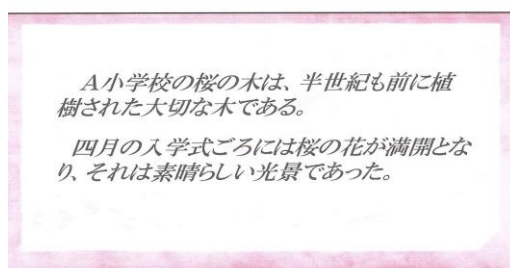


図2

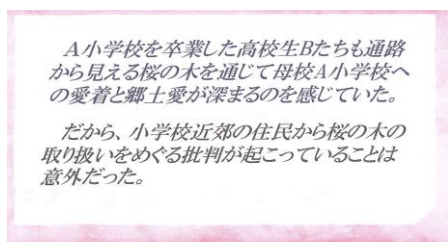


図3

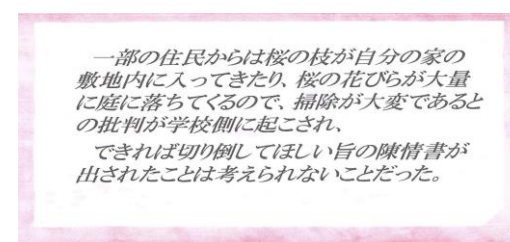


図4



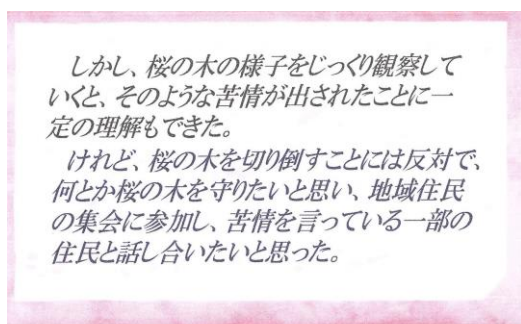


図5

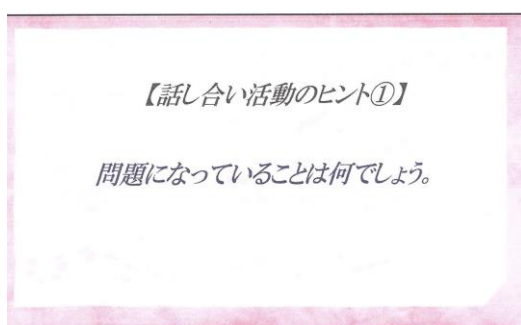
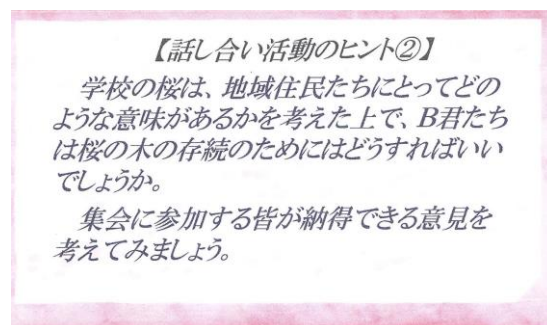


図6



(この動画教材については、2019年7月13日からYouTube上に公開している。「みんなの桜の木」で検索していただきたい。)

### 動画教材に対する生徒コメントと言説分析

この教材を使った茨城県A高校での道徳授業(2019年6月13日に実施)の量的分析の結果は、すでに拙論において明らかにしており、以下該当箇所を引用しておきたい(小川、長島、高橋2019、4~5頁)。

質問① 授業で使った動画は分かりやすかったですか。

「はい」17人、「いいえ」2人、未回答1人

質問② 授業で使った動画は教科書のような文字だけのプリントよりも良いですか。

「はい」17人、「いいえ」2人、未回答1人)。

質問③ 今日の授業で使った動画で、もっと良くした方がいいところがありますか。

「はい」5人、「いいえ」15人

このように、動画教材に対する印象は、概ね良いものであり、統計的検定を行うためのソフト「js-STAR」による直接確率計算(1×2)の結果も有意の結果が出ていた。ただ、質問①及び②で「いいえ」と否定的に回答している生徒の自由記述は以下のとおりである(Sは、生徒)。

質問①

S1 文字が速くて全部読めなかった。

S2 文字が小さくて読めなかった。

質問②

S1 自分のペースで見ることができない。

S2 文字が見にくい。

以上のような結果が拙論において明らかになったが、本研究では否定的な評価を行った生徒S1とS2に対して、後日改めてインタビュー調査を行った（2019年8月7日）。ただインタビューは、外部の小川がすると生徒側が自然な言動を行えなくなる可能性があるため、授業担当教員に行って頂いた。その生徒の回答コメントに対して小川が言説分析・考察を行った。

<インタビュー調査>

- ・男子生徒①と②は、アンケート調査で否定的な回答を寄せた2人である。
- ・①、②共に廊下側の一番後ろの椅子に着座し、隣同士
- ・T=授業担当教員（女） / S1、S2 = 生徒（男）

**男子生徒①**

T 動画を見てももらったんだけど、それはどうだった。

S1 うーん、まあ、文字は追えました。でもそれなら絵の必要はないですか。

T というと。

S1 だって文字だけで分かっちゃうじゃないですか。場面が絵だけ見てそれ要るのかなって思っちゃいました。

T 絵本的な感じを想像すればいい。

S1 そんな感じです。絵本とか漫画みたいな感じの方が絵の必要性を感じますけど。別々ならあえて見せる必要がないのかと。

T なるほど。ありがとう。他にこうしてほしい部分はある。

S1 特にそれ以外はないです。

**男子生徒②**

T 動画は、文字と絵とがバラバラになっていたけどどうだった。

S2 見えないのは変わりなかったですけど、バラバラの方が良かったと思う。

T それはどうして。

S2 文字と絵が混じってないからです。混じっていると背景が余計で見なかったです。

T 動画自体についてはどう思う。

S2 文字が見える動画であってもいいのだけれど、ただ絵が見えないところがあるなら紙のプリントでいいんじゃないかって思いました。

T 見えないことを改善する以外にもっとここはこうしてほしい点はある。

S2 見えればいいんで、特にないっすね。

【分析・考察】

先に示したように、教材「みんなの桜の木」は、基本的にはフォトムービー形式の動画になっている。さらに絵の部分と文字の部分は分けて表示されるように作成した。これは、最初に絵を見て各自のイメージを膨らませ、その後に文字による詳しい説明を受けることで、教材のより深い理解を広げてほしいという意図があった。なぜそうしたのかといえば、映像だけのドラマ的構成では一つの映像によるイメージの固定化が起きる可能性があり、そのようなことを避けるためであったからだ。今日のように映像が氾濫している時代では、一つの映像によって文字から得られる多様なイメージの創出が狭められる可能性があるからだ。そのため本教材では、先に絵を見せた後に文字によるイメージの多様化をねらった。

ただ、S1の生徒のように、絵と文字のそれぞれからイメージを膨らませるような理解があったことは意外だった。文字は追えたので、そうならば絵は必要ないのではないかとのS1の認識は独自な見方であるように思われる。さらに彼は、そうした認識のズレを乗り越えるために、絵と文字が一つの画面の中で分割されて表示されるような、いわば「絵本風の動画」を希望している点は興味深い。

S2の生徒の場合は、本教材の特徴であるそれぞれのコマが絵と文字とで分割されている点については、よい印象を持っていることが分かる。しかしながら、もしそのようにコマが分割されていて文字だけのコマがあるのなら、最初から紙のプリントだけでもいいのではないかとの指摘は興味深い。この指摘は、フォトムービー形式の動画の構造的な特徴を突いているように思う。こちらの作成意図としては、絵から受けるイメージの創出を文字によってさらに膨らませてほしかったが、むしろ彼には文字だけの教材の方がよいとの認識があるようだ。そのような認識に立てば、彼にとって絵は、文字だけで広げたい想像力を少なからず妨げるものであったかもしれない。彼の発言の真意がどこにあったのかは、さらに個別に聞き取りたい点である。

いずれにしても、否定的に回答している生徒たちへのインタビュー調査によって、彼らの絵と文字に対する認識の違いが明らかになり、フォトムービー形式の動画の様々な特徴と問題点が浮き彫りにされた点は極めて興味深い。

### 動画教材に対する高校教員の意識調査

さて本動画教材に対する意識調査は、B県全域の道徳担当教員向けのセミナーでも紹介し、合意形成を図る討議活動を実践し、その結果を質問用紙調査して、本教材の教育的効果や意義について検証を試みた。

調査対象は、本セミナーに参加したB県の全ての県立高校の教員100人である。なお、調査時期と方法については、2019年8月23日にB県教育研修センターで本教材を使った模擬授業を行い、その後2件法（はい、いいえ）の質問用紙調査を実施した。

(1) 質問紙調査項目

次の①～③を質問項目とし調査を試みた。

- ① 動画の教材は、紙媒体の教材よりも良かったですか。
- ② 動画の教材を活用した上で、グループ活動では話し合いを生徒たちが中心となって進めていくこととなりますが、アクティブラーニング型の学習は良いと思いますか。
- ③ 動画の教材で授業を行う際、指導上どのように活用してよいか、不安はありますか。

(2) 調査結果

「はい」と答えた教員と「いいえ」と答えた教員を数え上げ、1×2の度数集計表にまとめると、次の表のようになった。

表 調査結果：参加教員の評価

調査項目 No.	観測値1： 「はい」	観測値2： 「いいえ」
①	82	13
②	96	2
③	46	54

※数値は人数（無答は除外）

(3) 統計的検定による方法

表調査結果を統計的検定の考え方にに基づき、js-STAR（統計用フリーソフト）を用いて直接確率計算（1×2表）で分析を行う。

(4) 統計的検定による分析結果

質問①の「動画の教材は、紙媒体の教材よりも良かったですか。」を教員100人に尋ねた結果、「はい」が82人、「いいえ」が13人だった。直接確率計算によると、その偶然確率は $p=0.0000$ （両側検定）であり、有意水準が1%で有意だった。よって、動画の教材が紙媒体の教材よりも、教員に支持されたといえる。以下②～③を同様に行った。

質問②の「動画の教材を活用した上で、グループ活動では話し合いを生徒たちが中心となって進めていくこととなりますが、アクティブラーニング型の学習は良いと思いますか。」の結果は、「はい」が96人、「いいえ」が2人だった。偶然確率は $p=0.0000$ （両側検定）であり、有意水準が1%で有意だった。よって、動画の教材を活用した上で、アクティブラーニング型の学習を行うことは、教員に支持されたといえる。

質問③の「動画の教材で授業を行う際、指導上どのように活用してよいか、不安はありますか。」の結果は、「はい」が46人、「いいえ」が54人だった。偶然確率は $p=0.4841$ （両側検定）であり、有意ではなかった。よって、動画の教材を授業で行う際、教員は不安があるとはいえなかった。

以上の結果から、本動画教材は活字教材よりも教育的効果があり、アクティブ・ラーニング的な

話し合い活動にも有効であることが統計的に明らかにされた。

#### (5) 自由記述に関する結果

今回の調査では自由記述もしていただいた。この自由記述には、本動画教材に対する印象と、様々な改善方策が指摘されている。ここでは、その中の代表的なものを紹介しておきたい。

- ・良いので改善の必要はありません
  - ・シンプルな動画で様々なイメージが浮かぶので良いと感じました。
  - ・住民のためにも桜があることのメリットを感じてもらおう工夫があればもっとよかった。
  - ・この動画を是非活用したいので、学校のインフラを早く整えてほしい。
- 
- ・文字は、半分くらいの量で2頁にすると読みやすかったのではないのでしょうか。でもイラストだけではなく音楽（ゆったりめの）があったことはよかったです。
  - ・私の勤務する学校では、漢字が多すぎて理解できない子が半数は出ると思います。希望としては、文字送りのスピードをもう少し遅くし、ルビなどもふってほしいです。一画面上の字数が多すぎて生徒の中には読むのをあきらめてしまうものもいると思います。
- 
- ・シーンによって曲を変える。例えば桜の木が迷惑であるとのシーンでは迷惑そうな曲を流す。
  - ・BGM はよかったが、場面に合わせて途中で「タイプ」「雰囲気」「曲調」を変えらるともっと良かったと思います。
- 
- ・絵で表現するのは良いと思ったが、写真や動画を使った場合はどうなったのかを見てみたい。
  - ・アニメーション化して少し画像を動かしてみる方法もあります。
  - ・できれば絵よりも写真にすると、さらに効果的だと思います。
  - ・実際の桜の写真などを入れてみたり、桜の下で生徒が写真を撮ったものなどを入れてみたり、学校内の桜のイメージが伝わるものを入れてもよいかと思いました。
  - ・各個人のイメージをふくらませるため敢えて動画にしたことは理解できますが、実写だとより具体的なイメージが持てると思います。
- 
- ・音声や演技を実際に生徒に演じてもらおうとよかった。
  - ・生徒のナレーションや朗読劇の形で音声が入っていると良いと思いました。今回は敢えて無声だったかもしれませんが、生徒の朗読力がつきます。
  - ・文章が流れるだけではなく、音声として読むこともあっていいと思う。
  - ・登場人物のキャラクターが出すぎないようにイラストにしたり、文章を表示するのではなく、声で読み上げると、また違った感じになるのではないのでしょうか。
- 
- ・画像と文字を同時に出し、紙芝居風にする方法もあります。
  - ・文章は紙媒体でも読めますので、漫画チックにまとめた方が印象に残りやすいのではないかと。



- ・絵本のようなほのぼのとした作画が良かったと思います。

### 結語的考察

冒頭でも指摘したように、活字教材を使って討議型の話し合い活動を行う際の問題点は、教材が持っている道徳的価値の対立構造や、登場人物らの関係性がすぐに理解できない場合があることだ。授業を行う時には、活字による教材理解が容易に行えない生徒が少なからず存在する。こうした問題を解消するための一方法として有効だと考えられるのが動画教材である。本研究では、フォトムービー形式の動画教材を作成して、その教育的効果を検証したが、結果としては生徒対象の調査だけではなく、教員対象の調査でも動画教材に対しては概ね良い印象が多かったように思う。活字教材とは違い、動画教材の方が内容の理解を容易にするとの感想も多かった。

ただ、改善策については先述したように様々な意見が示された。まず、絵の部分と活字の部分とを分離したことについては、好意的な意見が多かったものの、細かいところを取上げて描かなかった絵については、生徒個人々のイメージを膨らませるといった意図がよく伝わっていない意見もあったように思う。むしろより細部を鮮明にすべきとの意見や、実写や写真等の具体的な映像による教材を求める意見もあった点には注意したい。さらに活字の部分の分量が多いことや、漢字にルビをふる必要があるとの意見も何件もあった。個々の高校の学力レベルの違いもあり、今後は教材作成の際の根本的な問題として再考する必要があるだろう。

ところで今回の教員の調査で注目したいのは、「音声」や「ナレーション」も必要ではないかとの意見である。このような意見はかなり多く、特に活字の部分に表示の際に、音声による朗読を求める指摘もあった。本動画教材の作成に当たっては、細部を取上げて描かない絵や、文字画面でも映すだけにして、生徒のイメージの幅を広げさせる意図があったのだが、そのような意図が、逆に文字理解が十分にできない生徒たちにはかえってネックになったのかもしれない。

「画像と文字を同時に出し、紙芝居風にする」との指摘や、絵本のような作画に対する評価は、生徒たちへのインタビュー調査でも指摘されており、生徒と教員の双方に共通する認識があった点に興味深い。このような指摘を受けて、一画面の中に「絵」と「文字」を別々に表記し、いわば絵本や漫画のような描き方をすること、さらにそれに音声ナレーションを入れた教材を作成すれば内容理解がさらに容易になるように思われる。

以上の諸点については、今後の動画教材作成の課題として受け止めたいと思う。

### 引用文献

- 荒木紀幸、2013『モラルジレンマ教材とする白熱討論の道徳授業 - 中学校・高等学校編 - 』  
明治図書
- 小川哲哉、2018『主体的・対話的な<学び>の理論と実践―「自律」と「自立」を目指す教育―』  
青簡舎

小川哲哉、高橋麻理、長島利行、2019.7.6「高校道德における動画教材開発に関する研究」  
『日本教育メディア学会研究会論集』第47号（日本教育メディア学会 HP）  
<http://jaems.jp/meetings/proceeding>、2019年8月31日閲覧）  
茨城県教育委員会、2018『ともに歩むー今を，そして未来をー』  
茨城県教育委員会、2016『高校2年生の道德プラス』

※本研究は、平成29年度科学研究費事業 基盤研究（C）（課題番号17K04841）の研究成果の一部である。